

魔獣母胎で病んでる彼女の強くてニューゲーム

鏡狼 嵐星

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある世界線では北水 柊という人間は転生者であった。

だが、ある世界線では北水 柊は非力なただの少年であった。

なぜかはわからないが、その世界線に記憶を持ったまま、回帰母愛が転移した。

この話はその世界線での話である。

やっぱり別の作品として出すことにしました。前作を読んでくれている方ならわかると思いますが、感想を欲して書いてます。一言でもいいので、お願いします。

目次

また始まる	1
『フィニス・カルデア』	7
英雄との再開と少年の会合	13
『ノウム・カルデア』	20
『向こう』と『こちら』	29
転生者一人目	36

また始まる

これは北水 終と回帰母 愛が愛し合っていた世界とは違う場所。なおかつ原作開始の約十年前。そして、この世界の、彼らの年齢が五歳のとき。

ふとした瞬間に回帰母 愛は自分自身の精神が五歳児に戻っていることを自覚した。理由は不明、自分が何かをやったわけでもない。だが、そんなことはすぐに頭から消えた。

しゅうはどこ？

彼女の脳はすぐに彼のことで頭が一杯になった。今、自分自身が寝ていた家のことも、かつて自分を襲おうとした最低な父親のことなど、ほんの一瞬も考えることなく、彼女は家を飛び出した。

外に出ると同時に個性を使用、なかったはずの角が急激に成長し、髪の毛から黒泥が生産される。ウガルを生み出し、飛び乗る。同時に背中の上でもう一体の魔獣を生成する。

「……ふむ。この状況は意味がわかりませんが、ティアさんの心境は理解しました。終さんを探せばよろしいですか？」

「今すぐ」

ドウムジは呼び出された瞬間に、彼女の記憶を頼りに、自らがするべきことを判断。『羊の知らせ』を使用し、多数の分体を街中に放つた。

「確認します。時間短縮を重要視するために、少々危険な手も容認する。数を増やしても構わない、ということでしょうか？」

「構わない。直ぐに」

「夜中で良かったですよ、本当に。何匹かに北水の名字を持つ戸籍を、直接探させます。終さんの名前はないでしょうが、その親族ならば探せます。この街に限った場合、同姓で夫婦、子供なしとなれば、そう大量にはいないでしょう。30分ほどください」

「長い。10分でやって」

「……追加で黒泥を、私二人分ください。分体を増やして、直接探します。いくら夜とはいえ、相当リスクが上がりますが、まあ、今更です

か」

わずかに人が通る、深夜の街。そのビルの上をウガルが翔ける。彼女が急いでいる理由は、ある場所に向かっているからだ。初めて、彼女が北水 柊という人間に出会った場所へと。

「ティアさん、一応言っておきますけど、柊さんはまだそこにいません。向こうの柊さんのお話では、一人で過ごしていた時間は五年も長くはありませんよ」

「わかってる。でも、あの場所に行かなければならない気がするの」「…………自由にどうぞ。ちょうど、柊さんの親らしき戸籍を発見しました。両親とも敵予備軍かつ子供なし。というか、これ以外の戸籍はまともな家庭ばかりのようですし、間違いないかと」

「場所は？」

「今向かっている方向と大きな差はありません。あの場所に寄る前にたどり着くので、丁度いいですね」

きょうもいつもとおなじ。おとうさんになぐられて、おかあさんにけられて、へやのはしつこでじやまにならないうようにねる。

へんななおいのするばんをたべる。おいしくないけど、たべないと、いたいことをされる。

おとうさんとおかあさんはいつもけんかをしている。ぼくはなにもいわないほうがいい。

「おい、おまえ、何だその目は!? ガキの分際で!」

いたい。またなぐられた。でも、こえをだしたら、またなぐられるからださない。

「ねえ、今日の私のお金は!?」

「んなもんねえよ、アバズレ女!」

「なんですって、このクズ!」

いつもとかわらない。きょうも、なにもかわらない。なにも……。

「随分とぼろぼろな家に住んでいますね」

げんかんのとびらがひらいたとおもったら、ひつじさんがはいつてきた？

「な、なによ、あんた。鍵はどうしたのよ!?!」

「あの程度であれば、針金一本でどうにでもなるんですが。まあ、それはそれとして、あなた方には邪魔なのでどいていただきましょう」

おくから、くろいふくのぎんいろのかめんをつけたひとがいつぱいきて、おとうさんとおかあさんをつれていった。

「しゅうっ!!」

しろいおんなのこが、ぼくにだきついてきた。ぼくはわけがわからなかった。みたことがないおんなのこだったから。

「こんなにつ、傷だらけになって！ 大丈夫っ、すぐ治してあげるから！」

「……あなたはだれ?」

おんなのこは、びくつとした。ゆっくりぼくからはなれて、ぼくをまつすぐみてる。おんなのこは、かなしそうなかおをしていた。

「……覚えてない?」

まつしろなからだど、くろいつの、そしてあかいめのなかにほしがみえた。すぐく、すぐく。

「きみのめ、きれい、だね」

「……っ!!」

おもわずきれいだって、いっちゃったら、おんなのこがもういつかいだきついてきた。さつきよりもちからがつよいきがする。

「ああ、しゅう、しゅうっ！ 間違いない、しゅうだ!」

こえがすこしたかくなつた。ないてる、のかな? なまえもしらない、女の子。だけど、

「ぼくはきみがだれかはわからないけど、なかなくていいよ?」

なくのはつらいことだから。ぼくはよくしってる。おんなのこがもっとつよくだきついてきた。ちよつといたいかな。

「取り込み中だと思われませんが、失礼します」

ひつじさんがわりこんできた。なんでしゃべれるんだろう?」

「あなたに抱きついていてる人は、あなたを大切に思っている方なので。突然ではありますが、柊さん、この人のために、我々についてきてください。よろしいですか？」

いきなりここにあらわれて、ぼくのいつものことをめちやくちやにして。ふしぎだけど、なんでだろう、しんじたい。おんなのこがないているのはぼくのことだとおもうし。

「どうして、ぼくを？」

「あなたでなければ、あなたがいなければ、この人は生きていけないのです。お願いします」

ひつじさんがあたまをさげた。ぼくなんかでいいのかな、ぼくがなにかできるのかな。

「ぼくでよければ」

ひつじさんのくちがわからないけど、わらったきがした。

「何しやがるー！」

柊さんをティアさんに任せ、柊さんの親らしいモノを睨む。正直に言うのと、言葉をかけることすらやる気がでない。だが、これも仕事のようなもの。オプリチニキに抑え込まれている一応人間と呼べるものたちに視線を向ける。

「良かったですね。ティアさんの意識は今、柊さんのことしか頭になり。そうでなければ、あなた達はどうなっていたか……。想像できませんよ」

「なんなのよ、あなたたち!? いきなり人の家に入ってきて! ヒー

ロー呼ぶわよー!」

……………。

「一旦黙れ」

おっと、あまりに自己中心的な上に話を聞かないので、口調が変わってしまいましたね。まあ、黙ったので丁度いいです。

「お前たちは本当にあの人の親なのかと疑います。お前たちみたいな

産業廃棄物からあの人が生まれたのかと考えると虚しい」

「な、なんなんだよ、あんなガキになんの用があるってんだよ!」

「……………ガキ、と言いましたね。柊さんの事を。確かに聞きました。」

「もういいです。最初から理解されると思っていない。お前たちには最初から何も期待していない。そして、あの人に傷をつけたことには変わりない」

「お、お前ら何なんだよ!? 何する気なんだよ!」

「そうよ、そうよ! さっさと離しなさいよ!」

震えているゴミ二つが騒がしい。というか、今は気にしていないだけのティアさんが、お前たちへの罰をどうするか決めるまでの問題でしかない。

「お前たちは親ではない。私の知る母親は愛情溢れる性格ではなかったですけど、子供に対して平等に愛がありました。私の知る父親は子に名前を与え、無条件にその子達を信じた。それが愛でないわけではない」

我々に、ティアさんに愛を教えた方が愛を教えられずに育ったなど。これほどの理不尽がそうあるでしょうか。

「お前たちは知らないと思いますが、あの人は私達の母親の大恩人なんですよ。愛を知らない私達の母親に愛を教えてくださいました。そして、愛をその子達である私達にも振りまいてくれた」

これほどの怒りを覚えたことは初めてですね。向こうの柊さんは過去のことを何一つ気にしていないようだった。それならば私達が気にすることではないはずだった。それでも、実際目にすれば、どれほど辛い目にあっていたのか想像に固くない。

「全身に打撲痕や切り傷、軽めとはいえ栄養失調らしき症状、筋骨があまりに細い。お前たちは何をしていた?」

本来なら重症だ。子供ならなおさら。この歳でこんな症状だったなら、十歳まで生きるのにどれほど苦労するだろう。周りのことを愛せるようになるのにどれほどの苦しみを知らるだろう。愛を振りまけるようになるのにどれほどの闇を知ったのだろう。

「お前たちはただでは殺さない、生かさない。その意地汚く、醜いその性根で。せいぜい生き延びることですね。私の考える限り、最悪の生き物に成り果てて」

オプリチニキたちに、いやオプリチニキになっているそれに指示を出す。さて、お二人のために新しい家を探しましょう。もう何も苦労はさせません、柊さん。私達がいる限り、あなたは悲しみを感ずることはない。感じさせない。

『フィニス・カルデア』

「さて、時間はかかってしまいましたが、住居を用意いたしました。これからお二人の家はこちらになります」

ひつじさん、えっと、どうむじつていうらしいんだけど、おうちをよういしたっていうから、ていあといっしょにまちにきた。

「ねえ、ひつじさん」

「ドウムジとお呼びください。どうされました?」

どうむじにつれられてきたところには、おおきなびるがあった。まうえをみても、ぎりぎりおくじょうがみえるくらいなの。

「ここがおうち?」

「正確にはこの最上階を全て住居用に購入いたしました。眺めはいいですよ」

いや、そうじゃなくて。そういうことじゃなくて。

「おかねとかどうしたの?」

「それに関しては心配することはありませんのでご安心を。中にはすでにお世話係がいますので雑用はお任せください」

いろんなことがあって、あたまがおいつかない。ぼくはどうしたらいいの、かな?」

「しゅう、行く?」

「わ、わかった」

ていあがてをひっぱる。わからないけど、いくしかないのかな。

「しゅうはなにか食べたい? なんでもあるよ?」

「ぼくはなんでもいいよ?」

ていあたちについていくっていつちやったし。いっしょにいかなきや。

テイアさんにエレベーターへ連れて行かれる柊さんを見送って、ピルのロビーに戻つてくると、その正面に仮面を付けた男がいた。

「フツ、ドウムジよ。我が父の様子はどうか?」

「スルトですか。まだ二日目ですし、多少警戒心がありますが、時間が解決してくれるでしょう」

「気楽だな？ 俺はしつかりと仕事を果たしてきたぞ？」

スルトがいくつかの書類を差し出す。受け取って目を通し、成果があつたことを確認して少々安堵しました。

「戸籍の登録自体はうまく行ったようですね」

「俺の他にイヴァン、ジーク、バベツジ、キングウ……。他何人かの知性魔獣を人間として登録した。これでなんの遠慮もなくヒーロー免許とやらを取りにいける」

「近々、ヒーロー仮免許一般枠の試験がありますから、全員合格をお願いします。すでにこのビル内で会社を起こす準備は進めてますから」

このビルで働く人間にみえる者たちは全てティアアさんにより作られた魔獣たち。その全員がある目的のために動いている。

「だが、わざわざ会社など建てる必要があるのか？ 他にもいくらでも方法はあるだろう？」

「これが手っ取り早いんですよ。この世界の柊さんを守りつつ、前の世界の柊さんの約束を守るなら」

仮面越したが、スルトの表情が変わったように感じる。

「ティアアさんは前回の約束を守るつもりです。ですが、今回はわざわざティアアさんがヒーローになる必要はない。金が手に入ればそれでいい。ならば数を増やしたほうがいい」

前回は柊さんがティアアさんにヒーローになることを勧めました。だが今回はそうではありません。ならば知性魔獣たちをヒーローにしたほうが効率がいいでしょう。

「この世界の柊さんは前回と違い、ごく一般的な子供です。高潔な精神も、強力な知識も、桁外れの予想能力も持っていない。ティアアさんが柊さんを傷つかせるようなことはないと思いますが、護衛は多いほうがいい」

「なるほど、確かに有名な組織の重要人物となれば、遠慮なく守っていても問題はあるまい。そこで会社を作るというわけか」

「ええ。ヒーロー稼業以外にもサポートアイテムなどにも手を出しま

す。大企業になればなるほど、表沙汰で手を出しにくくなりますから」

前回の世界では、柊さんが事件に巻き込まれた上、重症を負いました。それでもティアさんが世界を滅ぼさなかったのは、柊さんが事前準備ができるほど覚悟と先見のある存在だったから。

「二度とあのような事故を起こすわけには行かない。そうでしょう？」

「もちろんだ」

……前回の柊さんのあの精神は、一体どうやって出来上がったのでしょうか。それはわからない。だが、たった一時のティアさんとのやり取りを見て、本質は全く変わらないことがわかりました。そして、今、確実にわかっている2つの世界の違い。それは柊さんの精神状態。

「スルト、知性魔獣たち全員に柊さんとの接し方は気をつけるように行っておいてください。何が引き金で、両親による恐怖を引き起こすかわからない」

「……了解した。一言一句違わずに伝える。あの親とも呼べぬようなゴミども、厄介なものを残してくれた」

お二方の親たちにはそれはもう大きな罰を与えた。もう人間として誰も扱ってくれないような、悲惨で凄惨なものを。この会社の元手も彼らに借金をさせたもの。今や生きていることも辛いはずです。まあ、死ねないように弄りましたが。

「ドウムジ様、お父様がお呼びです」

近寄ってきた黒い鱗のナーガに呼び出しを受けた。

「今向かいます。スルト、お願いしますよ」

「くく、了解。我が父のため、我が母のため、全うする」

最上階そのものが一つの自宅となっており、家としての機能を含

め、娯楽もある程度楽しめるようになってきている理想的な住居である。その寝室の扉を開けて、中を覗く。

「お呼びでしょうか、柊さ、ん……?」

そこにいたのは、大人の姿になったティアさんがベッドの上で、柊さんを抱きしめて、恍惚な表情で、その柔らかな頬を舐めているところだった。柊さんはどこか困惑しているようだ。

「あ、どう、どうむじ! ていあが、ていあがおおきくなって、それで」
柊さんが抱きしめられながらわたわたしている。愛らしいのはわかりませんが……。

「ああ、大丈夫ですよ、柊さん。ティアさんの個性の影響ですから問題ありません。なので落ち着いてください。ティアさんも少しぐらい説明をしたらどうですか」

ティアさんの愛は角を育てる、と最初本人を含め、認識していた。が、正確には愛が深いほど最も魅力的な女性の形になりつつ、角を伸ばすらしく、現在、柊さんにあった日からティアさんの体の成長は著しい。今のティアさんの外見から考えると十代前半ぐらいであろう。私が提案すると、ティアさんは柊さんを抱きしめたままだが、舐めることを止めた。

「何があっただんですか?」

「しゅうが私の角をなでてくれて、嬉しくて嬉しくて、抑えられなくなっ

「いつものですね。はいはい」

これならば問題ないと判断して、会社の調整に戻ろうと考えていたところ。

「ねえ、どうむじ。おねがいがあるんだけど、いい?」

「何なりと」

柊さんのお願ひ、それは我々にとっては神の言葉に等しい。もちろん、全力を持って対処します。

「えっと、ぼくはふたりにたすけてもらったから、ここにいるの。でも、その、ぼくだけがこんないいことばかりあって、ずるいとおもうの。ぼくみたいなこはいっぱいいるとおもうから」

……この人は優しい。トラウマさえ抱えているはずなのに、この場にいる私達でさえ完全に信頼できていないはずなのに。この優しさは変わらない。これがこの人の本質、でしょうね。

「ふむ、なるほど。柊さんは同じ境遇の子供を救ってほしい、ということでしょうか？」

「えっと、うん。いたいのはいや、だから」

「了解いたしました。今から手配いたしますので、ご安心を」

安心する柊さんを見つつ、部屋をあとにする。この提案はある意味都合が良かった。

「いくらティアさんでも常時知性魔獣を運用するには黒泥が足りない」

ならば、どうするか。単純だ、知性魔獣全てを形作っている黒泥を節約すればいい。生物の核があれば、黒泥を大幅に節約して、知性魔獣を作ることができる。

「いくつかのデメリットが見つかりますが、その全ては『恩』を売っておけば、大方規制できる」

前回の世界の知識がある我々ならば、有能な人物を引き抜くのは容易い。柊さんとティアさんのために働いてもらいましょう。

「トリム、いますか？」

「なんですか、ドウムジ？」

お世話係としてここにいるトリムマウに一応のため箝口令を敷いておく。他の魔獣たちにも伝えるようにとも言った。

「さて、一年以内には大企業にしなければ、ティアさんに怒られてしまう。必死こいて、やりますか」

「全員準備はできているか？」

「君に言われなくても、すでにできているよ」

ヒーロー試験会場にある待機室。そこにいるのは知性魔獣の中でも、戦闘力が高く、人間に理解があり、人の定義するヒーローになっ

ても問題ないとされた者たち。

「むしろ、君こそ準備はできているのか？　この中で一番本領を発揮できないのはお前だぞ、スルト？」

長い緑の髪を大きくなびかせる、男とも女とも取れる人の完成形の一つ、キングウ。

「問題はない。すでにこの肉体での個性の調節も、十分に会得した」

赤い目の光を強め、笑い声を隠さない仮面の騎士、スルト。

「話は終わったか？　余らはただ試験を突破することだけ考えていれば良い」

部屋の奥で座するのは、巨大な青い体に雷を迸らせる、イヴァン雷帝。

「我は実技試験に関してよりも、筆記試験の方を心配している。知性魔獣は知識が突出しているものが多いからな」

機械の体から蒸気を噴き出し、隣にある自らの武器を整備する、バベツジ。

「そう考えると、一番合格に不安があるのは俺かもしれないな。頑張らないと」

緊張しているのか背筋を伸ばして椅子に座る、ジーク。

「いや、君が一番問題ないと私は思うが。まあ、心配することは必要だ。存分にすればいい」

手のひらサイズの無骨な石の人形を片手で操作しながら本を読む、アヴィケブロン。

ヒーロー関連企業『フィニス・カルデア』はこの六人を筆頭に、トップヒーローと引けを取らない逸材達を世に出していく。それが魔獣なのか、人なのかを知るのはほんの一握り。

英雄との再開と少年の会合

突如としてある企業が日本の経済界を揺るがした。

『フィニス・カルデア』。それはヒーロー自身の派遣も含め、サポートアイテム、事務所の制作などヒーローに関する仕事の全般を専門とするその企業は、数年の間にヒーローたちにとっての需要を一気に拡大した。

設立した瞬間に、その組織に所属した六人の新人ヒーローたちはすぐさま結果を出していき、翌年の『HERO BILLBOARD CHART』の百位以内に全員が載るといふ驚愕の成果を叩き出す。

さらに、個性によって迫害を受けた子供を無償で保護し、育てる特殊な保護施設『ノウム・カルデア』を築き、そこから続々と優秀な人材を排出していく。

独自のサポートアイテム制作の研究所を持ち、その出来栄えはプロヒーローを唸らせた。

たった数年で他の大企業と比べ物にならないレベルに成長し、提携もするまでになった。ライフスタイルサポート企業『アトネラット』や大手IT企業『Feel Good Inc.』などの一流企業に仲間入りしていると言うものも少なくない。

ヒーローの他にも優秀な人材が多いことでも、新聞やニュースに取り上げられた。ユーモアあふれる羊である取締役、ドウムジ。その恐ろしい外見に反して、情のあふれる社長であるエキドナ。そして、殆どの情報が存在しない『フィニス・カルデア』創設者、ファム・ファータル。

オールマイトの情報が多かった世間は、この新しいネタに大きく喰い付いていた。そんな情報が錯綜する中、オールマイトはその有名になっっている会社の中にいた。

「H A H A H A。まさかかの有名な会社の取締役と呼ばれるとは思わなかったよ！ 噂通りのユーモアな体をしているね！」

「あなたに言われると両方とも嫌味にしか聞こえませんが、オールマイト。忙しい中、時間を作ってきていただいてありがとうございます

た」

「いやいや。私にとっては無視できないことだったのでね」

一つの会議室にオールマイトとドウムジ、そして他に三人の男が座っていた。一人は既にヒーローランキング四位になったイヴァン雷帝。その巨大な膝に自分の腕を置いて、頭をその手のひらの上に置く。

「英雄よ。急ぐ気持ちはわかるが、覇気を抑えよ。それでは落ち着いて話もできぬわ」

「つと、そうだね。すまなかつた」

「我々もあなたの急ぐ気持ちはわからないわけではありません。話を始めてしましましょう」

高ぶる気持ちを抑えようとするオールマイトに対して、それを抑えなくとも良いとアドバイスにも似た言葉をかけるのは人馬にして、『ノウム・カルデア』の室長であるケイローン。

「では今回、あなたを呼ぶ理由となった情報を持つ人物を紹介します」
ドウムジの言葉を聞いた最後の男は椅子を下げて、立て掛けてあつた杖を使い、立ち上がる。その初老の男性は、白い立派なひげを触りながら微笑を浮かべ、大げさにお辞儀する。黒いコートは外側が黒いのに対し、内側が水色の鱗粉のような不思議なデザインをしていた。縞模様の長袖シャツに茶色のベスト、赤いネクタイと黒い手袋。その第一印象はなんとも胡散臭い。

そして、もう一つ気になるのはその隣においてある巨大な棺のようなもの。それは左右対称になった西洋風の棺で、その両端には蝶の羽のような装飾がされている。それは彼のコートの内側に描かれた模様と酷似していて、棺に繋がれている鎖を片手で持っている。

「改めて自己紹介させてもらうヨ、平和の象徴たるオールマイトどの。私の名はジェントル。ジェントル・モリアーティ。しがない数学教師サ」

オールマイトは人情家であるが、討つべきあの男の雰囲気似たその気配に思わず身をこわばらせてしまう。

「そこまで警戒されてしまうと怖いネ。まあ、仕方ないと割り切つて

くれたまえ！」

ハハハと笑う老人に対し、ハツとしたオールマイトが頭を下げるが、気にしないでくれと老人は笑うだけであった。

「では、オールマイト。連絡したとおり、契約を。私達はオール・フォー・ワンに関するある情報を提供します。その代わり、一つだけあなたには我々に対する貸しを作っていたいただきたい」

「……できれば一つ確認したい。その情報が正しい、という保証はあるのかい？」

その隆起した筋肉が、強みを増した青い目が、嘘を許さないと強くにらみつける。あえてオールマイトはその情報が正しいのかどうかを聞いた。世間に優秀な大企業の重要なメンバーである彼らが敵でないことを祈りながら。

「オール・フォー・ワンが近々、ある計画の実行のために動き出しているという情報」

「……！」

それはオールマイト自身には信頼できる警察の友人がおり、本人から確認がない情報として、一応聞かされていたものだった。それが本物であるという確証が強まったことに、気持ちを抑えられなくなるのを止めようとするオールマイトに更にドウムジが言い放つ。

「その情報をあなたが掴んでいるという事実を、オール・フォー・ワンが知っているという情報を提供するためですよ」

「んなっ!？」

思わず声が出てしまっているオールマイトに対し、ドウムジはため息をつく。ジェントルが顔に手を置き、大きく笑う。

「随分素直だね！ そのほうが人気が出ると私は思うけどサ！」

「仮にも平和の象徴と言われているんですから、ある程度会話術も覚えたほうがいいですよ？ あなたの指摘通り、騙されないために」

「……H A H A H A、言葉もないよ。だが、あの男のことだ。ありえないわけじゃない、いやむしろ、そうだと考えておくべきだったかな」

オールマイトは頭をかいている状態だった。彼自身は完全に降伏という感じで、信じると決めることにした。

「では、貸しの件でよろしいですね？」

「流石にこれはしようがないかな。甘んじて受け取るよ。ただ、私の信念に反することはしないからね？」

「もちろん、いい関係を築いていけるようによろしくおねがいしま……」

そんなとき、いきなり会議室の入り口がガチャと開く音がした。そこから現れたのは小学生ぐらいの少年だった。小柄で黒髪、本当に平凡な少年だった。

「……？」

オールマイトが疑問に感じるのも無理はない。ここは日本でもトップに数えられる大企業の中核であり、この場にいる人間はその会社の重役たち。悪い言い方になるが、一般人を相手にしているような暇を持っている人間ではないのだ。

「しゅ、柀さん!? なぜここにいるんですか!？」

「え、えっと、その、ク、クッキー焼いたから、食べないかなって、思っ
て、その、駄目だった?。」

「もちろんいただきますが、事前に連絡を入れてください。びっくり
しますから!。」

今しがた冷静に対処していたドウムジが慌てて、その少年を迎えに
行く姿はオールマイトにとって、驚愕の一言だった。本来なら大企業
の取締役という時点で、他人の機嫌を伺うことなどしない。だが、確
実に取締役であるドウムジが柀という名前の少年のことを最優先に
しているのは間違いなかった。

「みんなの分、持ってきたのっ! か、感想聞きたくて、いいかな?。」

大きな皿に並べられている不格好なクッキーたち。決して一流
の人間が作ったものではなく、家庭で母親の手伝いでもに作ったよ
うな、そんなクッキー。

「おや、クッキーとは。紅茶に合いそうだね。私の相棒を呼んでもい
いかな?。このクッキーに最も合う紅茶を入れてもらおう」

「余もいたごう。ふむ、大小様々あるな……」

「では、私も。あなたはどうか、オールマイト?。」

既にオールマイト以外の全員が、彼の周りでクツキーを取っていた。オールマイトは驚いたまま、そして言われるがまま、クツキーを取ってしまっていた。

「そういえば、なんでオールマイトがここに？」

少年の素朴な疑問にオールマイト以外が言葉をつまらせる。なにせ、情報を守る代わりに貸しを作ろうとしているなんて、そのまま言えるわけではない。

「簡単に言いますと、仕事です。それ以上のことはありませんよ」

「……ほんと？」

「……本当です」

「ほんとだね？」

「………はい」

「わかった。でも、ドウムジはやりすぎることがあるから気をつけてね」

徐々に言葉尻が小さくなっていく羊に、怒っているような様子を少しだけ見せる。そんな男の子をまだ固まった状態で見ているオールマイトに、彼は振り向いて言った。

「えっと、オールマイト、はじめまして。北水 柊と言います」

「……あつ、いやあ、A H A H A H A！ よろしくね、北水少年。聞きたいことが山ほどあるんだけど、いいかな？」

「質問は厳禁です、オールマイト。柊さん、ノウム・カルデアのほうに行っていただけでも構いませんので。ケイローン、ついていってください」

「了解いたしました。では、柊さん、行きましょう。生徒の皆さんはあなたが来るのを心待ちにしていますよ」

柊はケイローンによってすぐさま退席となってしまうた。オールマイトは行き場のない疑問をどうしようかと思っていると、ドウムジがそのまま床に伸びる。

「よりにもよってこんなタイミングで。柊さん、あなたは預言者ですか。あゝ、疲れた。今日休みにしましょう、そうしましょう」

「……この数分で君のイメージがだいぶ変わったよ、ドウムジ」

「取り繕わなくて良くなったんで、だらけてるだけですよー」

「ドウムジよ、もう少し取り繕え」

遠慮なくカーペットの上を転がるドウムジに、イヴァンが呆れていた。

「仕方ないサ。元より、彼の性格はこんな感じだからネ。それより、質問があるのだろうか？ 今なら答えてくれるサ」

ジェントルはいつの間にか用意していたティーカップに入っている紅茶を啜っていた。

「それじゃあ、質問させてもらおう。彼は一体何者なんだい？」

「簡単に言うと、会長であり、この会社の創設者であるファム・ファタールの唯一の身内です。終さんはあの人にもちやくちや溺愛されているので、会社の中でも自由に行動できるんです」

オールマイトは思わず、なるほどと思ってしまった。有名なヒーローが自分の事務所に自分の子供を入れることは珍しくない。だが、いくら会長の身内とはいえ、子供を自由に行動させるものだろうか。

「それに、だ。自由に行動できている理由は、この会社にいる人間はあの子に救われたものも多い。余もその一人だ」

「私も、その一人だよ」

今日何度目か、もうわからない。だがオールマイトはまた驚かされた。

「余も含め、この会社には異形型の個性が数多い。差別されたものも多く、ノウム・カルデアにも似たような迫害を受けた子が多い。そんな者たちを今もなお救っている」

「君の見立て通り、私は悪人だが。受けた恩を返さないほど外道ではないつもりだよ、私は」

「……最初は平凡な少年だと思っていたけど、認識を改めなきゃいけないね」

片や数年で上位一桁に上り詰めた異形型の個性を持つヒーロー。片やオールマイトに驚異と認識させかける自称悪人。

両方とも全く違う人間性を持ち、全く違う過去を持つであろう人間。その両方に恩を感じさせることの大変さはオールマイトはよく

知っていた。彼は北水 柊という人間にもものすごく興味を持つこと
となった。

『ノウム・カルデア』

『ノウム・カルデア』はある山の上に作られた特別な個性訓練及び特殊教育施設である。その敷地面積は英雄高校の体育祭で使用される会場が丸々十個ほど入ってしまうほど広大な土地があり、各々の個性に合わせた機構・施設・教師が揃っている。

一般的には危険視される個性を持つている人間ならば、その年齢に問わず、保護される。ヴィラン予備軍とされる一部犯罪者さえ、一時的な少年院のような扱いをされて、連れてこられるものもいる。

個性のせいで自らの命を脅かしたものの、個性のせいで人間と扱われなかったもの、自ら殻の中に閉じこもってしまったもの、社会に適応できなかったもの、その精神を壊してしまったもの、家族を守るために誰かを殺しかけたもの。

一流の教育や施設をいくつかの条件を満たすだけで受けることができる。

この場所に入る条件は単純明快。『個性』によって迫害、もしくは精神的苦痛を味わったことのあるものであること。

そして、将来期待されるのは二つ。なんでも構わないが、一流になること。『フィニス・カルデア』に所属すること。たったこれだけである。

もちろん、ここまで軽い条件であるならば、不純な考えを持つて入ろうとしてくるものもいる。それを判断するのが、裁定者の役割を与えられたものたちである。

「なんとも急な話ですわね。義父様おとうさまが来ると事前に聞いておけば、色々準備できましたでしょうに」

長い金髪を惜しげなく閃かせる、青いドレスの美女。片手に金色の天秤を抱えるのは、一年前にヒーローとして活動を始めた、『アストライア』。ヒーローランクは現在52位。ヒーロー業の傍ら、この施設の職員として働いている。

「そうは言ってられないでしょう。事前連絡もなしに柊さんをこの場所につれてくるのは、ドウムジの提案でしょう。ですが、我々がやる

ことは決まっていますから」

日本の古い伝統衣装のような着物を着こなす白髪青年はその笑顔
を絶やささない。『ノウム・カルデア』教育者の一人、『天草四郎時貞』。
「お出迎えご苦労さまです、ふたりとも。アストライアは二ヶ月ぶり
ですね、調子はいかがですか？」

「ケイローン先生、お久しぶりですわ。問題なくヒーローをできてお
りますし、それも全てこの場所と先生の教えがあったからこそ」

「その感謝は私ではなく、彼にすべきですね」

ケイローンの下半身の馬部分の上に乗って、必死にしがみついでい
た柵はケイローンによって地面に下ろされる。

「ケイローンが安全に走ってくれているのはわかるけど、やっぱり怖
い」

「すいません。私の体では車の運転はできませんから」

ふらふらとする柵を支えながら、ケイローンたちは施設の中へと入
る。山の表層は実践の訓練などに使われているが、山の中をくり抜い
て作り上げられた空間には様々な気候を再現した空間が作られてい
る。

「最初に向かうのは冰雪気候のエリア、『ゲッテルデメルング』ですね。
防寒対策はしっかりとお願いします」

テキパキと用意されていたコートを柵に着させ、施設の中にあるい
くつものエレベーターの一つに乗りこみ、地下に向かう。十分程立つ
たあと、扉が開く。

「よく来たな、歓迎するぞ」

扉の外は、氷で作られたような宮殿のような場所であった。そこに
いた紫色のドレスを着た女王に歓迎の言葉をかけられる。

「スカディさん！ お元気でしたか？」

「もちろんだ。この場所を与えてもらってからというもの、私の欲し
かったものは手に入ったも同然」

玉座のような場所から降りてきて、柵の質問の受け答えをする『ス
カサハ・スカディ』。ゲッテルデメルングの管理者であり、教育者であ
る。

「生徒たちの様子はどうですか？」

「問題ない。スルトが連れてきた特殊な目をもった娘も、イヴァンが見つけてきた人形を抱いた娘も、私の愛しき天使たちも、順調に育つておる。誰をここに連れてこようが、私は全てを愛そう」

「現在訓練中だ。会うのはまたの機会にしてくれないか？」

宮殿の入口から入ってきたのは、仮面が特徴的なヒーロー兼ヒーローアイテム開発局局長のアヴィケブロンだった。

「アヴィケブロンさん、訓練中だったの？」

「私が訓練していたわけではないが。私は訓練用ゴーレムの調整に來ただけだよ。今さっき、訓練が始まったばかりだから、邪魔をしないほうがいいだろう」

「そっか……」

残念がる柊の肩を、アヴィケブロンの隣から歩いてきた男が叩く。

「はっはっは！　そういうこともあるだろうが、まあ、気にすることはないさー！」

「ナポレオンさん」

豪快に少年の肩を叩く、大きな笑い声を響かせる長身の男。その言葉を聞いて、柊の表情が明るくなる。

「アストライアにはここに残っていただきましようか。訓練中なら、ちようどいいですから、評価してあげてはどうですか？」

「あなたに言われなくてもそうするつもりですわ、トキサダ。久しぶりに来たんですもの、その程度のことはいやりますわ」

やる気に溢れたアストライアが宮殿の入口から外に出ていくのを見届けて、柊たちは別のエレベーターを使い、違うエリアへと向かう。

「次はどこへ？」

「次は亜熱帯気候のエリア、『ユガ・クシエートラ』ですね。担当しているのは『アルジュナ・オルタ』です」

「毎回思うんだけど、名前がっこいいね。誰がつけてるの？」

「各エリアの担当者がつけてますよ」

エレベーターの到着音が鳴り、扉が開く。平原にはいくつもの泉があり、沢山の種類の花が咲いている。ふわりと凩ぐ風とともに、柊た

ちの前に宙に浮く黒い髪の黒人が姿を表した。

「ようこそおいでくださいました、義父上。ちちうえ今回はどういったご要望で?」

翼には到底見えない何かを背負いつつ、いくつもの色を持つ数個の球状のものを手に浮かべる『ユガ・クシエートラ』管理者、アルジュナ・オルタ。

「みんなの様子を見に来たの」

「それでしたら、少し前に訓練が終わり、昼食をとっていることかと。ここから遠くありませんので、徒歩で向かいます。あと、一月ほど前に『個性調節』を行った少年と少女ですが、順調に回復していません。離れた場所にいますので、昼食が終わったあと案内いたします」

アルジュナ・オルタの後ろについて行き、大きな石造りの都へとたどり着く。その場所では噴水の前で大人数が食事をしていた。その中で特徴的なのはある男女のペアである。

「たるいッス〜。ボクはのんびりゲームでもやっていたって何度言ったらわかるッスか、カルナさん」

「そうはいかなくて、ジナコ。お前の体は運動をせず、ふくよかになっている。体重を減らすべきだ」

「酷いッス、女の子に対してそれは酷いッスよ、カルナさん!」

片方は長身であり、表情を一切変えない青白の男。片方はメガネを掛け、ダボダボの服を着るボサボサの髪の女性。

「ジナコさん、カルナさん!!」

柊の呼びかけに、二人は真っ先に反応し、食事の手を止めて、急いで飛んできた。

「柊さん、久しぶりッス!」

「ジナコ、義理とはいえ父親だ。名前では呼ぶべきではないだろう」

「いや、むしろボクは明らかに僕たちより年下のこの子に、お父さんと呼ぶことがおかしいと思うッスけど。えっ、ボクが変なんッスか?」

心外だという顔のジナコに対して、申し訳無さそうに柊が言う。

「なんで僕はお父さんって呼ばれるんだろう? 僕も知らない」

「……柊さんがこのとおりツスよ。別に名前にかんしてはどうでもいいじゃないツスカ」

アルジュナ・オルタが呼びかけると、他にも何人か柊の周りに集まってくる。

「義父殿おやじじゃあねえかつ！ どうしてこんなむさ苦しいところにいるんだ!？」

黒い筋肉質の体を隠すことなく、巨大な車輪のようなものを抱えてくる赤い髪の大男。

「アシユヴァッターマンさん、久しぶり！」

「おう、久しぶりだぜ。義父殿のことだ、ここのやつんらの心配でもしてきたんだろ？」

「うん。みんな元氣そうで良かった」

大きく笑うアシユヴァッターマンにつられ、周りの人間も笑い始めたそのとき。町の外から、巨大な蛇のようなものに乗った、黒いコートと大きなマスクが特徴的な人物がアルジュナ・オルタの隣に降り立つ。

「最終的な治療が終わった。これからは経過観察に徹するように……。ん？ 義父さんか。ちょうどよかった」

アルジュナ・オルタに対してある患者たちの治療結果を伝えようとしていたところに、柊を見つけ、次の報告先がいたと言わんばかりに、脇に挟んでいた資料から患者の症状を説明する。

「例の『個性調整』をした二人に関してだ。一ヶ月間、二人共ある程度の副作用が続いていたが、女の方はもう問題ない。だが、男の方は本人の個性も相まって、まだ全快とは行かない。しばらくは療養で様子見だ」

「えっと、もう二人に会っても問題ないの？ アスクレピオスさん」
「問題ない。だが、決して動くようなことはさせるな。個性のコントロールが完璧になるまでは、自分の個性で自分の肉体を引きちぎりかねない。あとは考えさせるような質問も控えるように。思考加速して、自分で脳を焼き切りかねない」

「アスクレピオス、注意するのはいいことです。ですが、もう少しオブ

ラートに包んでください」

少し顔が青くなっている柸の心象を察したケイローンが、フオローを入れる。

「それで、件の二人はどこに？」

街から離れた小さな集落。地下の空間の一つである『ユガ・クシエートラ』の端に位置するここは、『個性調整』が行われた者たちが多くいる。その中に一つだけ日本家屋のような和風な家の一つだけあり、そこには二人の少年と少女が住んでいた。

『個性調整』。これは端的に言えば、調整という名の変質^{寄生}である。ティアの魔獣を寄生させることで擬似的に知性魔獣を作ることである。だが、それは個性調節をされる身からすれば、自らが操りきれなかった個性を強力に、かつ扱いやすくしてくれる。良くも悪くも個性社会であるこの世の中では、これほどの救いもそうそうないだろう。

「お茶が入りました、セキ様」

眼鏡を掛けた茶髪の女性がふすまを開け、寝室へと入る。十畳はありそうな大きな部屋の真ん中に敷かれる布団の上で、体を起こしているのは小柄な少年。見た目は中学生になるかどうかで、顔の作りだけを見れば、相当な美青年である。が、その無表情のようなその顔と、大きく開いた黄色の瞳孔は見た人に恐怖を抱かせる。

「……ヒナか。未だに信じられぬ。世界とはこうも静かなものなのだな」

「はい。セキ様、世界はあなたの想像していたほど騒がしいものではないのです」

少年は伸び過ぎている自分の髪を見て、外の景色を見て、ヒナと呼んだ少女を見て、無表情だった表情が少し和らいだ。

「苦勞をかけた、ヒナよ。今をもって初めて、私は世界を、そしてヒナを見ることのできた」

「セキ様……！」

少女は少年の初めて見せる表情に、歓喜の色に感動し、涙を貯める。今にも二人は抱きしめあいそうな雰囲気であった。

「いい雰囲気であるのは重々承知ですが、失礼しますよ」

ふすまの外から声をかけて、ケイローンは中へ入る。柊がものすごく申し訳無さそうにしているのは気のせいではないだろう。

「セキさん、ヒナさん。調子はどうですか？」

柊の質問の前に、セキと呼ばれた少年とヒナと呼ばれた少女は柊に對して、頭を下げる。

「私の持つ全てを持って、貴公に感謝を。あなたのおかげで私は知りたかったものを知ることができた」

「私からも、お礼を。私の一生をかけて、この恩をお返しします」

「ちよ、ちよつとまって!?! 僕は、僕は何もしてないよ。個性を調節したのは、えつと、ファム・ファアトル、だよ?」

もちろん、個性調節を行うのはティア本人だが、その仕事はファム・ファアトルと言う名で動いていることもしゆうは知っていた。だから、礼を言われるのはティアだと考えるは当然だった。

「否。私もファム・ファアトルと名乗った人に礼を尽くそうとした。だが、彼女は『私はそんな物に興味がない。私はしゆうに頼まれたからやったに過ぎない。感謝するなら、そのすべてを持って、しゆうを助ける』と言った」

「同じことを私も言われたわ。彼女は本心からそう思ってる、そう感じたから、私も、セキ様もあなたに恩を返す」

二人共、彼女の言葉が何一つ嘘偽りが無いことを知っていた。目の前にいる少年が彼女に頼んだからこそ、この場に生きていると理解していた。

「……では、これからのあなた達についての相談をしましょう」

ケイローンは二人の覚悟を聞き、都合が良いと思っていた。それは彼が純正な魔獣であるからこそ、でもあった。

「我々、『ノウム・カルデア』はあなた達に一流になることを課します。どのような分野でも構いません。たった一つで良い。何かの達人を求めています。あなた達は何になりますか？」

既にセキとヒナは、『ノウム・カルデア』所属である。理由はセキの個性の調節のために、セキとヒナは『ノウム・カルデア』で一生働くことを契約していたから。

「私の個性は戦闘にこそ、意味を持つ。故に、ヒーローを志そう」

「セキ様がそれを望むなら、私はそれを全力で支えます」

「いいでしょう。では、アルジュナ・オルタにそう伝えておきます。体が全快したあとは地獄ですからお覚悟を。クラスとランクはある程度訓練したあとでもいいでしょうし、おいておきましょうか」

いい笑顔でかんたんに地獄と言えるケイローンに、柎はオブラートってなんだつけとなっていた。

『探せばいるもんだね、知性魔獣に適合する子が。そうそういるもんじゃないけどなあ』

世界に存在する巨大な一本の柱のようにみえるエレベーター。そこに『何か』が腰掛けていた。空間がブレるように何かがそこにいる。その言葉は決して誰にも聞かれることはない。発言されていないのだから。

『この施設といい、会社といい。めちやくちやだな、やること全てが』腕にみえるブレが、頭にみえる光を抱えているような動作をするが、輪郭がぼやけ、存在もはっきりしない。この空間を把握していると言っても過言ではない、アルジュナ・オルタも彼には気づいていない。

『さて、俺がやることはまだあるし、道草食ってるわけにはいかないか』

徐々にブレがなくなっていく。わずかに笑うように体を震わせて、消滅する。

『この世界には一体何人転生者がいるのか、君らに調べてもらったほうが早いかな？ まあ、俺も用心深く行こう』

『向こう』と『こちら』

『混乱しているところ悪いが、俺にも時間がなくてね。一回しか言えない、ちゃんと聞いてほしい』

今、ここがどこかもわからない。真っ白な空間に僕ともうひとりの誰かがいる。その人は僕よりも少し背が高く、ほんの少し声が低くて。でも、顔が見えなくても、なぜか見たことも聞いたこともあったような気がして。

『この世界は本来の歴史と全く違う方向へと進んでいる。その要因は別の世界から来た、転生者と呼ばれる者たちだ』

ちよつとまつてと喋ろうとした、だが、それは言葉にならなかった。喋れなかったからだ。

『これは俺が一方的に語りかけているだけだからなあ。君から俺に話しかけることはできない。こんなとんでもない話、信賴するかどうかは、君が決めてくれ。時間がないから続きに行こう』

僕は黙るしかなかった。この人の声は本気だつてことはわかった。聞かなきゃいけないって思った。

『この転生者という存在は本来一人いたら耳を疑うレベルなんだけど、何故かこの世界には最低でも五人いる。多分、もつといると思う』
転生者っていうのが、何かわからない。他の世界からやってきた？
『世界のためと一応言うが、俺ができることは限られている。だから君の力を借りたい』

僕が、なにかできるの？ 僕自身は何もできないよ。

『いや、君の大事な人である、ティアの力を借りてほしい』

どうしてティアのことを知っているの、と心のなかで問いかけてみた。返事が来ることを期待した。

『そうだな、君が力を貸してくれるなら、次の機会に教えよう。何度も言うけど、時間がなくてね。やってほしいことだけ伝えたい』

曖昧なものだった。でも、この人はもう一度僕と会おうとしていることがわかった。不思議に、それは嫌ではなく、むしろ嬉しかった。

『まずは俺の話ティアではなく、ドウムジにまず話してくれ。ティ

アに話すかどうかでもドウムジに判断してもらってほしい』

ドウムジに？ 確かにドウムジはいろんなことを知っているけど……。

『次に、転生者は二種類いて、平穩を望むものと壊すものがあるということ。君が胸に留めておいてほしい。彼らにどう対処するのかが君の裁量にまかせる』

それは、危険な人がいるかも知れないってこと、だよ。それはちゃんと考えたほうがいいかも。

『本格的にこの世界が変わるのは、君が十五歳になったあとの春からだろう。それまでになるべく転生者を探してほしい』

ここまで勢いよく話していた誰かが、初めて何も喋らない時間を作った。でも、その誰かはずっと僕を見ている気がする。

『……ごめんね、いきなりこんな話をして。君にとつてはいい迷惑だろうが、知っておいて、損はな……いか……ね』

なんとなく見えていた輪郭が大きくぶれ始めた！

『も……時間……か。次……15……春……だ！』

待つて！ せめて名前を聞かせて！

『お……は、ヒ……イラ……ギだ』

「しゅうさん、しゅうきーん？」

「んにゅ……」

「寝ぼけてますか？ もうついていますよー」

「はっ!？」

ここは、部屋の中？ 外の景色がビル街ってことは、ここはフィニスカルデア？ さつきまでノウム・カルデアにいたのに。

「途中、ケイローンがほんの少し目を離している間に、寝てしまっていたとお聞きしました。まだ他にも来てほしいところがあるといわれましたが、あなたの体調が最優先なので気にすることはありませんよ。また後日にしましょう」

ドウムジがドウムジ用の机でパソコンをカタカタといじっている。僕はソファに寝かされていて、体の上に毛布がかけてあって、寒くなかった。

「ティアさんは個性調整が終わったら飛んできますので、あと十分ほどお待ち下さい。あなたが帰ってきたと聞いて、急いで今日の分を済ませ……」

「ドウムジ！」

「は、はい？ どうされました？」

珍しく、ドウムジが驚いている。でも、どうしても今伝えたくて、まくしたてるように話してしまった。ドウムジは何度か驚くことはあっても、最後まで口を離さずに聞いてくれた。

「ふむ、だいたい把握しました。今回の件はティアさんには話さない方向性で行きましょう」

「……ドウムジは疑わないの？」

「はい？ まさか柊さんが私を騙そうとしてるとでも？」

「だって、夢の話だよ？ いくらなんでもちよつと馬鹿だなあって思わない？」

ドウムジは目をよこに引き伸ばしたように変えて、冷蔵庫の中から缶コーヒーとりんごジュースを取り出してきた。

「むしろ柊さんが私を騙すような嘘を必死で作って話してくださいのなら、私は嬉々として騙されてあげたいのですが」

えっ、そうなの!?

「顔に出えます、柊さん。これほど嘘がわかりやすいのに、あなたの必死さがわからないほどポンコツでも人間不信でもないつもりです」

今まさに顔に出ていたみたいで、ジュース缶を僕に渡しながら、ソファの隣に座る。

「まあ、大筋はわかりましたから、細かいことは後日にティアさんがないところで。私、独自にその転生者とやらを探してみましよう」

「……何もできなくて、ごめんね」

「滅相な。私はもしあなたが世界のカラスが白くなったらいいのにと言ったら、それを実現させて見せましよう」

そんな無茶な!? 流石にそんなことお願いしないよ!?

「はっはっは。ジョークですよ、羊はやれないことはやりません。それに、柊さんの言っていたヒイラギという人物が特に気になります。善人か、悪人かの判断ぐらいはしなければいけません」

そ、そっか。何故かあの人は信用できるって思ってるけど、ドウムジはそこも考えている。やっぱ賢いなあ。

「すぐにティアさんが来るようなので、私は失礼します。他にやることもありませんし」

「う、うん。わかった」

「たった数時間ですが、ティアさん、結構耐えているので、本当に、本当にお願いしますね」

「だ、大丈夫だよ?」

私は自分の執務室を出て、会社を飛び出し、まっすぐノウム・カルデアまで向かっていた。

柊さんが見たという夢に出てきた柊^{ヒイラギ}という人物。「転生者」という単語を使用し、なおかつ世界の改変を予言し、ティアさんをティアと呼び捨てにした。

私はこの人物が『前の世界線の北水柊』であるとしか思えなかった。わざわざ核心を言うことなく、それとなく近いものを匂わせて、その対策を練らせようとする姿勢はあの人に間違いない。

ノウム・カルデアにたどり着き、その本棟ではなく、脇の道に入り、そのまま草花が露出した場所を駆け下りていく。本棟とは離れた場所にあり、街とはほど近い小さな横穴。この世界では、本当にただの小さな横穴。

「この世界に来ているのですか……? 何が目的で……?」

かつて我が父母が始まった場所。この世界に来た瞬間、向かおうと

した場所。ここだけはティアさんから記憶を移されている完全な知性魔獣だけが場所を知っている。ノウム・カルデアに属するものはどれも知らないはず。

そこになにかがあったわけじゃない。だけどこの場所に誰かが訪れたような雰囲気を感じた。あくまで感じたに過ぎない。他の知性魔獣たちが来たのかもしれない。もし、来ているのだとしたら。

「あの人がわざわざ私に相談するように『こちらの柊さん』に言った。なぜ？」

理由の心当たりはまず1つある。このことを伝えれば、ティアさんが何が何でも探し回るはず。だが、その場合、こちら側の柊さんはどうなる？

「考える。あの人がただいたずらに情報を撒くか？」

私が選ばれたなら、私の知識で何かをしろということのはず。転生者は何が何でも探し出すとして、果たして本当にそれだけでいいのか？

「まず『向こうの柊さん』はいつから来た？」

年齢は？ 時期は？ 考えると、不可思議な矛盾が頭に思い浮かぶ。

「私は、私達は一体いつから来た？」

少なくともオールフオーワンの対決に関しては覚えている。そこに至る順序まで。他に、お二人の出会いや結ばれた日も覚えている。だがそれ以上の出来事に関して明確に思い出せない。その後、体育祭のこと、夏合宿のこと、お二人が教師になったことも、知性魔獣を使って訓練をしたこともその事実は覚えているのに、その光景が思い出せない。

「記憶が一部明確ではない……？ 私は、いやティアさんはなぜこの世界に来た？」

あのときは深く考えず、ずるずるとここまで来た。だが、改めて考えれば、おかしい話だ。ティアさんが前の柊さんをおいて、この世界に来るなんてことがあるか？

「ない。ならば、ティアさんは望んでこの世界に来たわけではない？」

なにかの結果としてこの世界に来た？」

もしそのなにかが柀さんのためであるならば、納得がいく。この世界に来た理由がそうだとしたら、『向こうの柀さん』は何がしてほしい？

「……………」。まず、転生者という単語はおそらくティアさんのことも含まれる。あの人は善悪の判断をするように言った。ならば、善の方は引き込み、悪の方は危害を加えてこない限り、監視がベスト」

無益な殺生の望まないあの人なら、これが譲歩できる最大。『こちら柀さん』が十五になるまでにはまだ数年ある。それまですべてを終わらせる必要がある。

「それまでに記憶の整理もしておかねば」

記憶の混乱なのか、本当に覚えてないのか。そこは判断しなければいけない。『向こう』か『こちら』。二人の柀さんのどちらを優先なんて考えが出ることも、あの人にはお見通しなんでしょうか……………」

「厄介な役割ですね。私に任せてよかったですかねえ」

いつもと変わらない夜。ベッドの上でティアに抱きしめられながら眠る。

親がいたときは変わって、温かい布団とベッド。僕を愛おしそうに抱きしめるティア。不満なんてあるはずがない。

『いや、君の大事な人である、ティアの力を借りてほしい』

ティアは基本的に、ティアって呼ぶことをほとんどの人に許していない。許されているのは、僕とドウムジくらい。

でもあの人はまるで長年そう呼び続けたみたいなの自然さだった。僕よりずっと近くで。ずっと長く。

チクリとする胸の痛みを必死に押し込めて、眠気に身を任せる。どうか、この時間が続きますように。どうかこの胸の痛みがすぐに消え

ますよ。う。

転生者一人目

深夜。暗い空を街の明かりが照らし、月の明かりを霞ませる。本社
の明かりがついていないくらい部屋で、私はコピー機から出てくる資
料を見つめていました。

この会社のデータ、ヒーロー関連から得た情報、私の個性で集めた
手がかりでわかった、この世界と向こうの世界の違い。

さらに、この世界の歴史自体は向こうの歴史と何ら変わりはありません。
歴史に名を残すような人物、国、文明が変わっている部分はない上に、
経済、世間のニュースも前回から大きく変わったものはありませんで
した。

だが、この世界で確実に違うことをいくつか発見して、少々驚いて
います。ティアさんと柊さんに関連性のあったある人物の性別が変
わっていました。

一人目は爆豪勝己。この世界では勝紀と名が変わっていて、女と
なっていました。性格や個性自体には変化なし。

二人目は轟焦凍。名前こそ変わっていないものの、こちらも女。先
程と同じく性格及び個性に変化なし。

次に存在しなかったはずの人物。向こうの世界では確実にいな
かったはずの存在。

一人目に轟歌努かどく。轟家次男。向こうの世界では次男は轟夏雄と
いう人物であるはずでしたし。母親似の真っ白な髪を持つ、卑屈気味
な青年。個性は『冷氣生成』。自分を中心に冷気を生成して操作しま
すが、冷気しか操れないため、気温に弱いそうです。

二人目に緑谷入常いりつね。緑谷家長男。緑谷出久の双子の兄であり、誰か
らも好かれるような性格であり、個性も強力。まさに生まれついた
ヒーローのようだと言われ、評価される男。個性の詳細は『再生』。
名の通りですが、四肢欠損レベルだと、再生に相当時間がかかるら
しいです。

その他ものものを含めた個人情報のコピーされた用紙を眺める。
前者二人は転生者と断ずるには早いでしょうね。なにより調べてい

る間にわかったことが子供さながらであるし、知性の突出や特異的な行動などは見られません。

だが、後者二人は少し違う。まず前回の世界にいなかった時点で怪しいですね。それに歌努駆という男の方は突出した能力こそありませんが、緑谷入常は違う。幼い頃から好成绩を叩き出し、運動能力も突出。天才ともてはやされているそうです。

私の考えでは、緑谷入常はほぼ黒でしょう。轟歌努駆のほうはまだ断定はできませんが、黒に近い。まずは轟歌努駆に対して接触を図るとしましょうか。毛の中から携帯を取り出し、スルトに向けて電話をかける。

「こんな時間になんのようだ？」

「エンデヴァーから娘の指導をしてくれないかと散々言われているそうですね」

「ああ。だが、メリットがないと断っているが」

「受けてください。柊さんに対して、最大級のメリットができました」
「ほう。そこが気になるところだが、お前が言うならそれは間違いないのだろう。ククク、了解した」

「ついでに轟焦凍という人物を見極めてください。指導方法は指定しません。なんなら『ノウム・カルデア』の施設を使っても結構です」
「そこまで許可するのか。いいだろう、我が母や我が父を守る尖兵程度には最低限、鍛えてやる」

「お願いします」

電話が切れ、もう1度資料に目を向ける。前の世界での過去、いやこの世界での未来において、柊さんとティアさんと関わりの深かった事件に関わる者たちにも接触しておきますか。一応味方として。

決して僕は手を抜いたわけじゃなかった。ロシア異聞帯のときも、キリシユタリアの元にいたときも、カルデアと戦うときも。だが、僕は最終的に誰にも勝てなかった。

ギリシヤ異聞帯でリンボに殺されかけ、ラスプーチンと会話したのを最後に意識が途絶え、気づいたらこの世界に生まれ変わっていた。

「おーい、歌努駆ー。ゲーセンでも行こうぜー」

魔術の代わりに個性なんてものが存在するが、この世界は平和ではない。自分の体に魔術回路がないことに気づいたときは、夢であることを願った。

「……俺はいい」

「またかよ。最近、付き合い悪いぜ？　なんかあったのか？」

「なんでもない」

「まあ、いいけどよ。じゃあまたな」

高校なんてものに通っているが、魔術協会で生きてきたときとは緩すぎてあくびが出る。全てが緩い。逆に藤丸があそこまで甘かった理由がわかった気もする。

「ロックだけは向こうときさほど変わらないな……」

唯一良かったと感じたのは、携帯につなげたイヤフォンから流れてくるロックのリズムは聞き親しんだものだったことだ。荷物をまとめ、別に帰りたくない自分の家へと変える準備をする。

家へと帰る途中のリサイクルショップで、少し古めのロックCDを探すが、最近の日課になっている。そのリサイクルショップの店番をしている初老の男性に挨拶を済ませて、CDを物色する。

「目新しいのはないか……」

ふと目にした一枚のCDのデザインに、白い長い髪の女性が雪の下で立ち尽くすデザインが合った。僕は思わず、彼女のことを思い出してしまった。

「アナスタシア……」

ジャンルはラブソングと好みではないが、それを持ってレジに向かうとしたときだった。

「ほう、そうだったジャンルも好みなんですか？　意外と純粹なんで

すね」

真後ろからいきなり聞こえた声に思わず、腕をふるってしまったが、そこには誰もいなかった。どうなってる？

「下ですよ」

視線を下にずらすと、そこにいたのは一匹の羊だった。しゃべる羊なんてものが、魔術無しでありえるなんて、今まで想像しなかった。だが、目の前にいる以上信じるしかない。

「いきなり話しかけてくるんじゃない。というか、一体何なんだ、お前」

「それはいいません。私は『ノウム・カルデア』に所属しているドウムジと申します」

ノウム・カルデア。この世界に唯一、向こうの世界の名を持つ会社であり、そしてあのイヴァン雷帝が所属する会社。最初見たときは驚愕という言葉では表せないほど腰を抜かした。なぜあの男がヒーローなぞに、と考えざるを得なかった。僕の異聞帯では、起きること自体が天災でしかなかった男が。

「はじめましてですが、あなたに用があつてきたんですよ。轟 歌努 駆さん」

名前が知られている？ 父親となつている男はエンデヴァーとして有名だが、その家族は有名なわけではない。こいつ、明らかに僕を狙っている？ 何が目的だ？

「あいにく、父親のことは何も知らない。妹の方にご執心だからな」
「ええ、知ってます。何度も言いますが、私はあなたに会いに来たんですよ」

言っている意味がわからない。僕に一体何のようだ？

「まあ、なんです。これからお暇でしょう？ 付き合っただけませんか？」

「何が目的だ。それを話そうともしないやつとなんかと付き合えるか」

羊は片足を使って悩むような動きをしたあと、自分の毛の中に手を入れた。

「言つたとおりです。あなたに会いに来た、いえ正確には情報交換をしに来たんです。あなたはこの世界のこと知りたいことはありませんか？ 私はあなたの世界を語ってほしいところですが」

こいつ、知っている!？」

「どうやらあなたは疑り深いご様子。ならば、取引をしましょう」

取引、か。僕は今、情報面で圧倒的に不利だ。別に漏れたって困らない情報だが……。いや、待て。丁度いい機会だろ。この世界について、イヴァン雷帝について、そして彼女について、詳しく聞くには今しかない。

「……取引の内容は僕が決めていいんだろうな。ドウムジ」

「おや、乗り気ですね。いいでしょう、こちらの要求だけ叶えてもらえばければ、私に叶えられるのならば、どんな要求でも結構。大概是叶えてあげられますよ」

「ようこそおいでくださいました、ドウムジ様。お二人ですね、こちらです」

東京、銀座。その中でも特に高いビルの最上階にあるフレンチレストラン。その中で、小さなテーブルとそれに合わないほど大きな個室に、雰囲気似つかわしくない羊と少年が食事のために席についた。ドウムジが一通りの注文を済ませた後、歌努駆は口を開いた。

「その見た目で、肉を食うんだな」

「こんな見た目ですが、人間の戸籍ありますか？」

「ああ、そうだったな。そんな外見でも、お前は一応人間だな。まったく個性っていうものは意味不明だ」

「それ、差別発言ですから、私の前以外で言わないでくださいね？」

歌努駆が大きな肉のステーキを切り、口にした。歌努駆自身はあまり上等なものを食べることを好んでしなかったため、美味しいと感じ

る反面、むず痒かった。

「取引の内容を確認したいのですがいいでしょうか？ まあ、私が要求するのは『あなたの過去』をすべて話してもらうことだけですが」「……僕が要求することは山ほどある。僕の過去を聞く理由、僕の過去に関連してお前に聞きたいこともあるし、僕のやりたいことを手伝ってもらおう。取引の内容は僕が決める、それでいいんだよね？」

「できることにも限りがありますよ？ まあ、私が語れることは語りましょう。やれることはやりましょう。ここまで譲歩しているんですから、嘘は付きませんよね？」

「これは取引だ。その上、内容はこつちが決めていい、と来た。こんな
に有利な状況はそうないんだぞ、そんな馬鹿なマネはしない」

両者ともに持っていたナイフとフォークを置く。

「まずは僕の方から語ろう。そのほうがお前も都合がいいだろうから
な」

僕は異聞帯のを中心にドウムジに語った。魔術が使われていた世界、カルデアという組織、クリプターの存在、サーヴァントという影の英雄、異聞帯とその王であるイヴァン雷帝のこと、その世界の結末までそのすべてを語った。

「ふむ、なるほど。あなたが『ノウム・カルデア』という単語に対して、
過剰に反応したように見えたのは見間違いはありませんでしたか」

「僕が今喋ったことが僕の体験した全てだ。まあ、僕はキシユタリアの異聞帯で、リンボにとどめを刺されてからの記憶はない。気づいたら赤子になっていただけだぞ」

「いえ、私が欲しい情報は得られました。ご協力ありがとうございました
す」

本当にそうか？ 表情が単純すぎて、その真意までは読み取れない。だが、満足していない、納得していないことはわかる。

「お前がそれでいいなら、僕の話は終わりだ。僕がさつき質問したことを説明してもらおうか」

「貴方の過去が知りたいのは、あなたが転生者であるから。これだけでは説明したことにならないので、どうしてあなたが転生者だとわ

かったかどうかについてご説明します」

それを話してくれるのか。多少ごまかされるだろうと思っていたけど。

「簡単に言えば、私はこの世界とほとんど同じ世界からタイムスリッ
プしてきたんです」

「……違う時間軸からのタイムリープか」

「理解がお早い。故に将来何が起るのかはある程度知ってます。私
は前世の知識を利用し、前の世界にはないものを洗い出しました。そ
のうちの一つがあなたです。転生者である確信は最後までありませ
んでしたが」

「つまり、僕が転生者であることを知ってたわけではなく、カマをかけ
られて、僕がそれを漏らしただけか。何か論理があるのかと思えば、
ただのバクチじゃないか」

「そう言いますが、転生なんてものに論理なんて作れませんよ。現
実にあることを怪しむレベルです」

ドウムジの言葉は正論だ。僕のした話も妄想だと言われれば、それ
で終わり名上、変人扱いは避けられないだろう。

「僕の過去について聞いてきた理由はわかった。次だ」

「おや、タイムスリッ普してきたことに関しての質問はよろしいので
？」

「僕と同じ世界から来たならまだしも、この世界のことに関しては興
味ない。一応聞くが、僕のいた世界に心当たりは？」

「ないですね」

ならイヴァン雷帝も全くの別人である可能性のほうが高い。いや、
そうとしか考えられない。

「ならいい。最後だ。僕は探したい人がいる。手伝ってくれ」

「前世のアナスタシアと呼ばれているお方ですか？」

「ああ」

「この世界からいるかもわからない一人の人間を探すと？」

「少なくとも僕の前世にはイヴァン雷帝がいた。ノウム・カルデアと
いう組織の名前が存在することを含めれば、まだ希望があるはずだ」

言い分としては苦しいか。だが、こいつの協力を得られなければ、世界中を回って彼女を探すなんて事はできない。事前に提示した条件には含めた。ここで断るはずは、ない、はずだ……。

「……………条件がいくつかあります」

「飲む」

「即答ですか。臆病なようで、肝が座っていますね。高評価です。それだけ、あなたの思いが強いことも理解しました」

表情はあまり動いていないが、明らかに声音が上がった。どうやら成功したらしい。

「まず、今通っている高校をやめてもらって、ノウム・カルデアの組織の一つに所属していただきますよう」

「いいのか？ 高校を卒業するぐらい待っても構わないが」

「なに、そこらへんはどうかします。あなたの探したい人が見つかるまで、別の仕事を並行して行ってもらえばいいですし、そのあたりは私が斡旋します。今、世界に支部を伸ばしているので、そこを回ってもらってもいいでしょう」

「……………条件と言えるのか、それは？」

「これからです。第一に、あなたの今後の人生で、我々の組織以外のあらゆる組織に所属することを禁止します。この国にいる上で必要最低限の関わり以外は絶ってもらいます。まあ、身内以外はほぼ全てです」

組織の内情を知られたくないのは当たり前か。

「わかった」

「躊躇しないですね。友達います？」

「ほっとけ。次は？」

「もしあなたが目的の人を見つけたとして、その人に関しての全てはあなたがどうにかしてくださいね。生活とか色々あるじゃないですか？」

「もともとそのつもりだ」

「おや、かつこいいお言葉ですね。最後ですが、我々の主人に忠誠を誓っていただきますよう。シンプルですね」

.....

「最後の最後に爆弾を持ってきたな？ 単刀直入に聞くが、お前の主人は信頼できるのか？」

「ええ、少なくとも自分の為に死ぬとは言わない方ですよ。あなたが従順であるならば」

「……もともとから飲むと言った。構わない」

「では、契約完了ですね」

「ああ、契約完了だ」

ドウムジが指もない足で、器用にグラスを上げてみせる。僕もそれに合わせて、水の入ったグラスを上げる。

この一日で、今まで色あせたように見えていた世界に初めて色がついたように感じた。

アナスタシア。この世界にいる確証があるわけじゃない。でも、必ず見つけてみせる。そのためになら、僕はすべてを掛けてみせる。

「さて、歌努駆さん。さっそくご自宅にお伺いしても？」

「カドックと読んでくれ。そのほうが僕も都合がいい」

どうも、ドウムジです。カドックさんを見事に取り込みました。これで転生者は二人目ですね、いい調子です。

蛇足ですが、カドックさんが話していたアナスタシアという方は、すでにノウム・カルデアにいました。名前が違っていたので、全然気が付きませんでした。見つけた瞬間に立ち会ったのですが、流石の私でも、カドックさんが可愛そうになりました。